漢字の成り立ち［象形（しょうけい）・指事（しじ）・会意（かいい）・形声（けいせい）］

漢字の意味を推し量る手がかりとしては、漢字の成り立ち方について知っておくこともたいへん有効といえます。漢字の成り立ち方は、次の四つにまとめられます。

①象形　この世界には、山とか川、魚とか鳥などといったように具体的な形のあるものと、上とか下、大とか小といった具合に形のない抽象的な概念を表すものとがあります。

このことは、この世界にあるものを文字で表す漢字の成り立ちにも、そのまま当てはまります。象形は、ある具体的な形を象（かたど）る漢字で、その形をスケッチふうに描いた、いわば絵文字です。

［例］山（52 頁参照）、川（53 頁参照）、魚（73 頁参照）、鳥（74 頁参照）

②指事　これは、形を備えていない抽象的な事柄について、その事を符号的に指し示す漢字です。

［例］上（54 頁参照）、下（55 頁参照）、小（56 頁参照）、大（57 頁参照）

③会意　これは、意味を会わせることでできた漢字ですが、この世界には象形や指事だけでは表せないたくさんの事柄や思想などがあります。それらを表すために、二つ以上の象形と指事の文字を組み合わせたものです。たとえば、「明」という漢字は“日”と“月”を組み合わせたものです。

［例］家（71 百参照）、間（75 頁参照）、育（82 頁参照）、美（83 頁参照）

④形声　これは、形と声の両面を備えた漢字です。形は意味を、声は発音を指します。たとえば、「江」という漢字はよく見かけると思いますが、これは水の意味の“氵”と、音を表す“工（こう）”を組み合わせてできたものです。

［例］空（64 頁参照）、歯（87 頁参照）、緑（89 頁参照）、磁（109 頁参照）

象形と指事が基本で、それを組み合わせたのが会意と形声というわけです。

ところで、漢字を、その本来の意味と異なる意味で使うことがあります。転注（てんちゅう）、仮借（かしゃ）と呼ばれるものがそれです。前述の象形、指事、会意、形声にこの二つを合わせて「六書（りくしょ）」といいますが、これらについても簡単に説明しておきましょう。

▼転注　車が転々ところがって元の所から離れ、川が流れ流れて海に注ぐように、その漢字の本来の意味が他の意味に移るということです。

［例］「楽」は、楽器の象形字で“楽器”が本来の意味ですが、楽器によって演奏される“音楽”の意味に転用します。また、音楽を聞けば楽しいので、“快楽”という使い方も生まれました。

▼仮借　漢字の本来の意味に関係なく、その発音を仮に借りるということです。音だけあって文字のない言葉を書くのに、同じ音の別の意味の字を借りて当てたものです。

［例］数字の「10」を表す漢字がうまく作れなかったために、同音の“十”を借りて、これを表しました（もともと十は「針」を意味する字で、音は「シン」でした。このとき、数字の10を意味する言葉の音もシンであったために、同じ音である十を借りて表しました）。そのため、“はり”は“十”に“金”を加えて“針”となったのです。ちなみに「拾（ジュウ・シュウ・ひろう）」を、数字の「十（じゅう）」の意味に使うのも仮借です。